

# 啄木からのメッセージ

はじめに

今年（2021年）は郷土の先人・石川啄木が亡くなって109年になる。啄木の作品は作られてから100年以上も経つが、今でも新聞の一面コラムなどに、短歌や評論の一節が引用されて、現代の世相について、コラム子の見解が述べられることが多い。そうしたことは、いわゆる三大紙のみならず、経済紙や地方紙でも時折り見受けられる。

例えば、「はたらけど はたらけど猶わがくらし楽にならざり ぢつと手を見る」という短歌を糸口に、現代の若者に多い非正規労働による貧困、ワーキング・プアの現状を分析し、それを打破するための提案がなされたりする。

この他にも、啄木からのメッセージがコラムなどに反映される例は多く、啄木の場合には短歌や評論の他にも、詩、小説、日記、手紙などからの引用例がある。この稿では、エッセイ「一握の砂」<sup>〔注〕</sup>からのメッセージを3件、述べたい。

「高きを見給へ」

このエッセイは、盛岡中学の後輩へのメッセージであり、冒頭に「年若き旅人よ、何故にさほうつむきて辿り給ふや、目をあげ給へ、高きを見給へ」と書き出して、前向きに生きていくことの大切さを説いている。

このココロは、晩年の詩「飛行機」に通じるものがあり、「蒼空」を見つめて、天を目指せ、という生き方や心の持ち方についてのメッセージである。

「爾の立つ所を深く掘れ」

エッセイの前半にある「爾（なんじ）の立つ所を深く掘れよかし。さらば清き泉湧き来らむ」との文章からは、「自分の足元をよく見なさい。そうすれば宝の山を掘り当てるだろう」という意味の啄木からのメッセージを読み取れることができる。

これは啄木のオリジナルではなく、「哲人の訓（をしへ）也」と記しており、古代ギリシアの哲学者・プラトンの名言から引いて、自分が置かれた環境の大切さを説いている。

「林中の譚」

エッセイの後半には、文明のために人間が切り開いている自然破壊に対する警告を、森に住む猿とのやり取りを通じて描いた寓話「林中の譚」を配して、啄木の自然観を披露している。痛烈な文明批判は、100年以上経った現代にも通じる。

こうした啄木の作品を読むたびに感じることは、啄木はどのようにして、現代にも通じるような先駆的な考えを持つに至ったのだろうか、ということだ。

筆者なりの結論は次の三点、第一に新聞各紙からの情報収集、第二に刺激し合う友人の存在、第三に物事に対する懐疑的な姿勢、ではないかと考えている。

特に新聞は、新聞社に関係した職業に就いたこともあるが、浜民でも四紙、東京ではさらに多くの新聞の読み比べから、世界や日本情勢を分析していたとしか思われない。

〔注〕 歌集「一握の砂」と同じタイトルだが、全く異なるエッセイ。これは、盛岡中学校校友会雑誌第10号（明治40年9月20日発行）に掲載された。



石川啄木記念館  
館長

森 義 真